日中親善へ新風　初の大学交流

愛大が視察団計画

中日大辞典に新語を取り入れ　将来は留学生も

【豊橋】政、財界を中心として進められる日中交流の中で、こんどは文化交流の一役をになって豊橋市の愛知大学（細迫朝夫学長）の教授陣が訪中する。同大学は二十五日、同大学編さんの中日大辞典刊行会評議員会を開き、同辞典改訂のために学術視察団を中国へ送ることを決めた。国慶節祝賀のため、二十七日に訪中する日中友好協会（正統）訪中代表団の穂積七郎氏（前社会党代議士）が中国側へ計画を伝えるが、訪中の了解が得られれば、大学単位としては戦後初の学術視察団となり、日中文化交流の新しいページを開くものとして期待される。

愛知大学は戦前、中国研究のメッカといわれた上海の東亜同文書院の関係者を中心に二十一年に設立。元東亜同文書院大学長の故本間喜一教授ら中国関係の教授陣十数人、蔵書約十万冊を持ち、語学、社会科学など各方面の中国研究に大きな成果をあげている。

「中日大辞典」はまず、昭和六年ごろ、上海の東亜同文書院で企画が立てられ、終戦直前には資料カード約十四万枚が集められたが、敗戦でカードを国民政府軍に接収された。しかし、終戦当時の東亜同文書院大学長で、のち愛知大学学長になった本間喜一氏はあきらめきれず、二十八年「中日友好のために役立てたい」と郭沫若氏に返還を願った結果、翌年の引揚船「興安丸」で、日中友好協会へ届いた。そこで、同協会はこれを元の関係者の多い愛知大学にゆだね、同大学では三十年四月から鈴木択郎教授を編集委員長に東亜同文書院大学の元教授や愛知大学関係者が編集に取組み、四十三年二月に完成させた。

Ｂ６版、約二千ページ。集録された語いは戦後日本で出版された中日辞典が六万五千語なのに対し、約十三万語。文字改革が取入れられ、文化大革命で生れた新語も収まっており、第一版一万部は売切れ。ことし四月に第二版六千部を出し、年間千五百部ずつ四年間で売る予定だったのが、この八月ですでに一年分が売れ、中国研究者の間で活用されている。

だが、これまでの版では、文化大革命後の中国の変化がまったく取入れられていない。「文革は、中国史上、まれにみる精神的大事件だ。新しい意味をもったコトバを辞書に取入れなくては」「中国の学者の辞書に対する評価も聞きたい」そんな声が関係者から強くあがり、ここ数ヶ月、検討を重ね、この日の評議委員会で訪中計画が正式に決った。

訪中団メンバーは鈴木択郎教授、今泉潤太郎助教授（いずれも中国語専攻）のほか、社会科学関係教授陣も含め、四、五人になる見込み。来年の春休みに約一カ月訪問し、北京の中国科学院語学研究所や北京大学を訪れたいという。

この計画は、細迫学長が郭沫若中日友好協会名誉会長あてに手紙にしたため、二十七日訪中する穂積七郎氏に託される。郭会長は中国側に保管されていた東亜同文書院時代の資料を日本側に返すとき大きな力となっており、このお礼の意味もこめて、「中日大辞典」第二版も一冊細迫学長から贈呈する。

同大学では、訪中の成果をもとに五十年ごろに第三版を出す計画だが、この訪中が実現すれば、政治、経済など社会科学関係の訪中団や、交換留学生も検討する。

中国研究所（東京）の話では、戦後の日中交流のなかで、大学が単独で学術視察団を中国へ送るのは初めてといい、実現すれば、画期的なできごとと評価している。

細迫朝夫愛知大学学長の話　愛知大学は中国とは切っても切れない関係にあり、中国ブームに乗った計画ではない。地道な学問の面で交流し、本格的な日中交流に力を尽くしたい。

穂積七郎氏の話　訪中したら郭氏のほか要人にも積極的に話し、実現に努力する。文革の成果を正しく取入れることは何にもまして重要なことと思う。

〔注〕朝日新聞　昭和四六年（一九七一）九月二十六日（日）所載。